丹語源考」、山本守「蒙古包名義攷」のほか、桑田六郎「宋と大食」、佐藤圭四郎「アッバース朝時代のマニ教について」、藤本勝次「カリフ・ムウタシムとトルコ奴隷兵」などアラビア關係のものが目につく。つぎには清朝史關係で、石田幹之助「郎世寧傳攷略補遺」、小野川秀美「何啓・胡禮垣の新政論議」、田中克己「通譯グルフマン」、羽田明「ガルダン傳雜考」、三田村泰助「滿洲シャマニズムの祭神と祝詞」など五篇に上り、民國に入つては、三上諦聽「中山艦事件の一考察」がある。法制史では、安部健夫「讀元典章札記三則」、內藤乾吉「敦煌發見唐職制戶婚廐庫律斷簡」、仁井田陞「スタイン敦煌發見の天下姓望氏族譜」、佛教史では、小笠原宣秀「明清淨土教の指向」、塚本善隆「敦煌本シナ佛教々團制規」、野上俊靜・稻葉正就「元の帝師について」、吉岡義豐「歸去來辭と佛教」、史學史ないし書誌學では、今西春秋「六國史の體例」、內藤戊申「斷代史について」、河崎章夫「清史稿の諸版について」、藤枝晃「西夏經」、守屋美都雄「養生月覽について」。そのほか田村實造「明代の九邊鎭」、森鹿三「居延出土の一册書について」などがあり、日華關係については、小野勝年「入唐僧圓修・堅慧とその血脈圖記」、中村孝志「東京大船主イッチェン攷」、橋川時雄「倭人が鬯草を貢いだこと」がある。

（日比野丈夫）

近代における中國と日本

北山康夫著

昭和三十三年十一月　法律文化社（京都）
本文二三六頁　年表、參考文獻　一二頁

この本は、表題の示すごとく「近代における中國と日本」、いいかえれば日中關係史の叙述を目指したものということができる。日中關係の正常化への一つの障礙として、それに對する國民の歷史的理解の欠除を指摘しうるが、これが啓蒙の書として本書の出版は時宜をえたものである。しかし、試みとして新らしいものだけに、概說（＝通史）としての構成の上でも、方法論（＝理論）や表現（＝文章）の上でも、また人物の取扱いの上でも多くの問題を殘しているように思われる。

(1)構成　著者は「日清・日露戰爭以來、日本の政治の中心は常に大陸政策であり、これと中國の民族運動との對立が、アジアの近代史の基調をなしている」と考えられるところから「中國の近代史をできるだけ、日本の歷史とからみ合せて」叙述すること、また國民のアジアに對する無理解は西洋基準の思考法が一般化していることに起因するとも考え、そうした日本の近代化の性格を中國の「內發的な開化」？との對比においてとらえること、この二點を大きな眼目にしているようにみられる。ところで、記述內容から推定するに、この本はおおまかにいって、①前期（義和團事件ごろまで）――日中兩國の近代化の對比を主題にする、②中期（辛亥革命の前後）――日中兩國の連帶主義を強調する、③後期（五四運動いご）――日本の侵略主義と中國の抵抗運動との對應關係を略述する、といった構成がとられている。つまり、記述上の三本の柱（圖式）が適切に提起されているのであるが、それらが三つの時期に分割されてしまい、それぞれの圖式の歷史的な展開過程と、各時點でのそれらの相互關係が意識的に掘下げられることなく終ってしまったという感がつよい。

このことは、一つには日中關係史の叙述にあたって、獨自の時期

區分をたてる配慮に欠けていたことを示すものである。時期區分は、段階規定ということの外に、階級對立を主軸にして歴史的諸要因を評價按配するという操作を意味しているが、諸矛盾の激化する近・現代史にあつては、こうした「交通整理」は叙述の前に欠かすことができないものである。もつとも、整理の仕方によつては紋切型の味氣ない叙述に終る場合もあり、『昭和史』批判のあとに物された本書は、この點を考慮して、骨組主義的な叙述の仕方をさけて挿話主義的な叙述の仕方を採用したものであろう。前者が少くとも基本的事實だけは萬遍なく盛り込もうと志向するのに對して、後者はそれを犠牲にしても、どこかにアクセントをおくことで事實を精彩あるものにしようと努める。啓蒙的な概説書のいき方として一利一害あるが、後者の場合とくに歴史の流れが遮斷される點と、理論的把握がよわめられる點に問題がある。本書にも、この欠陥が示されている。

スジとしては、やはり時期區分をキチンとやつて、骨組主義的にツボをおさえた上で、著者の意圖を生かすといつた段取りをとるべきであつたろう。これまでの中國理解の欠陥が、中國問題を一面的に解釋するということで誤謬を積み重ねてきたというところにあつたともみられるので、日中關係史の叙述においても全面的な取扱いが望ましく、記述の三本の柱は並列(同時)的にとりあげる必要があつた。

(2)理論　しかし、このことは方法論上かなり困難な課題であることはいうまでもない。少くとも日中兩國の獨自な發展と、兩者の相關々係、およびそれをめぐる東アジアの國際關係＝列強のアジア進出などについての法則的把握が要請されるが、研究の進んでいない現状からいえば、ここではとくに理論的な見通しの立て方と、それとの關連における個々の具体的事實の處理の仕方が問題となろう。

便宜的に、先の三期にわけたおおまかな時期區分によるとして、

①前期(アヘン戰爭から義和團事件ごろまで)は、ちようど資本主義が發展し、さらに帝國主義の段階へ展開する時期であるが、國際關係の上でも、また日中兩國内の問題としても、資本主義への法則的理解が多分に欠けているといわねばならない。その一例として、一八三七年ごろ、イギリスはアヘン輸出で不正の富を蓄積し、産業革命を行つた、というような誤まつた記述(本書一〇頁―一一頁)があげられる。ここでは、日中兩國のアンシャン・レジームの崩壞と、體制の立直しの仕方が追求されねばならない。單に佐久間象山や魏源といづた個々の思想家の言動を對比したり、日本の洋學と中華思想といつたイデオロギーの比較によつて兩者の優劣をつけてみても、生産的な解答はえられないであろう。だいたい、日中兩國の近代化の對比をこの段階に限定しておこなうことは事態の本質を見誤らせる恐れがあり、しかもこの時期ですでに問題になる日本の侵略主義的方向への追究を欠くために、日本が一面的に美化される結果を招いている。これは明治前半期の天皇制の確立過程への論及がみられないこととも關係するが、その反面ではまた自由民權運動の中にみられた連帶主義の檢討をも欠くこととなつた。

②中期(辛亥革命の前後)において強調されているのは日中兩國の連帶主義であるが、自由民權以後の變質過程には論及されていない。ここでは、大正政變との關連において大陸浪人の役割を再檢討する必要がある。ところで、かつて變法運動において日本に期待をよせた維新派と、その系譜をひく立憲派の反日・親英米的傾斜との關係

は、日本の滿蒙進出という事實によってしか説明しえない點に、より一層注目してほしかった。また、日本の一面的美化は、日露戰爭をアジア防衛の戰爭とみる(本書一五一頁)見方に導き、孫文ら革命派の同盟會結成への起因をここに歸さしめているが、しかしながら同時にこの戰爭に對する立憲派と革命派の對應の仕方を混同している點は解せない。「日本のロシアに對する勝利は、立憲政治の專制政治に對する勝利であると信ぜられ、中國においても一刻も早く議會政治を實現しようとした」(本書一〇八頁)のは、革命派(資產階級下層)ではなく、立憲派(資產階級上層)であったし、これは日本を恐れたためでもある。こうした混同は、一九〇五年のロシア革命の革命派に對する影響如何を問う餘地を失わせてしまっている。かれらの民粹主義(ナロードニキ)的傾向は問題にされねばならない。この立憲派と革命派の兩派が、權力の座にある洋務派(李鴻章)→北洋派(袁世凱)に對應するものとして生れてきたのは、日清戰爭前後である。これまでに、資本主義の浸透にともなう封建的階級關係のブルジョア的編成がえ、とくに地主制の近代的分解の方向が示されなければ、このことは說明がつかないように思われる。

革命派は、立憲運動に反對したからこそ立憲派(保皇派に代表される)と激烈な論爭を展開したわけであるが、同時に中國內部では對外ボイコット運動や利權回收運動(→鐵道國有問題)等の指導權を立憲派に握られていたのである。これは、辛亥革命における失敗の一要因となる。革命派は、それ自体が內部に複雜な構成分子をかかえており、辛亥革命への接近=事態の急迫化とともに、內部對立の激化=分裂傾向をふかめていった。それは經濟的にも不均等な發展をとげた諸地域の革命勢力が一体化されたことの必然的結果でもあるが、日露戰爭はその戰線統一への促進的要因として理解すべきである。著者もいうように(本書一二五頁)、湖北では十九世紀末から革命運動がおこり、武昌蜂起はそれらの勢力を基盤におこされたものであった。しかし、章炳麟の言論上の指導性や、中部同盟會の運動上の主導性の強調=つまり民族主義的方向の評價は、一定の制約のもとで=つまり辛亥革命の達成後、かれらは革命の目標を見失い、反動勢力との妥協に走ったという事實の確認の上でおこなわれなければならない。これは、ブルジョワ勢力の結集狀況(階層的・地域的etc)に關連するとともに、また著者もいうように(本書一二四頁)、その階級的な制約からして農民との結合をなしえなかったことにも問題があろう。しかし、本書において太平天國——義和團——辛亥革命前夜の民變(抗捐抗稅、搶米など)——白狼(革命後の農民暴動)と推移した農民の動きは、必らずしも系統的に明確に記述されているわけではなく、進步的知識人と農民との對應關係は一面的にとられすぎているようにも思われる。

辛亥革命の失敗は、先にもふれたように、單に同盟會內部の分裂のみに歸しえない。第一に帝國主義の策動があり、とくに滿蒙領有をねらった日本は、列強の袁世凱支持に同調した(本書一五一頁)といった追隨的立場にあきたらず、南北兩勢力に對して各種の策動を試みている。孫文が財政困難を救うため止むをえず日本と結んだ漢冶萍借款は南京革命政權の命取りとなったが、それは一方で孫文の滿蒙放棄を前提としており、またその裏には日本のブルジョア勢力の華中制覇の野望がひそまれており、これに立憲派が反撥したからでもあった。立憲派は革命の過程で全國的に地方政權の指導權を握り、袁世凱の反動支配への橋渡しの役割をつとめた。こうした革命

の過程には、中國資產階級の上層分子と下層分子のそれぞれのおもわくが働いていたのであつて、それを見落しては革命政權の公布した臨時約法のブルジョア民主主義的性格も、また北方政權に參加した立憲派が商務總會の意向を代表して施行した產業立法のブルジョア的性格も見落してしまう結果になる。しかし、中國のブルジョア的勢力の弱さは自らを分裂狀態におとしいれて政權擔當の可能性を失わせ、結局は北洋軍閥系の封建的勢力をはびこらせることになる。日本には當時共和制への恐れと同時に共感があり、それは護憲運動への刺激となつたが、革命の不徹底な結末はかえつて對華蔑視感を增す結果となり、日本の指導者意識がつよめられるとともに擧國一致的な中國侵略の方向が打ち出されていつた。第一次大戰はこの方向への劃期點となつたが、とくにロシア革命を經過して共產主義への恐れ(赤化防止というタテマエ)が加わるとともに、中國內部における反動勢力育成の方向がつよめられた。この時期に中國における民族資本の發達、インテリゲンチヤの量的增大をみるが、國家的保護の欠除、帝國主義支配の強化という事態の中で、その革命的方向をつよめ、五四運動を必然的なものとしたのである。

③後期(五四運動いご)は、日本の侵略主義と中國の抵抗運動の相關々係が主題とされるが、日本の敗戰をへて中華人民共和國の成立をはじめとする戰後の諸問題にいたるまで、簡略な骨組が提示されるにとどまつた。いわば、本論の附錄としてその後の經過を簡單に示した梗概のような役割しかもたされていないようにみられる。著者が大きな眼目とした日本の大陸政策と中國の民族運動の對應關係という圖式も、その本格的展開の段階となるほど記述が簡略化される結果になつている。著者の全般的な問題提起はこの段階において總括的檢討がくわえられてしかるべきだと思われたのに、このような形に終つたことは不思議である。再考をまちたい。

(3)人物　人物の扱いは、恐らく著者の苦心したところであり、林則徐・魏源—康有爲・梁啓超—章炳麟・魯迅といつた配置は妙をえているが、また檢討を要する點も多々あるように思われる。『昭和史』批判いご、骨組主義的叙述は人物の取扱いに論難が集中した形であつて、これにとつてかわつた挿話主義的叙述において人物が大きく取扱われることは當然であるが、それだけにまたここでの人物の扱いは全体の叙述にかかわるような重さをもたざるをえなくなつてくる。人物の歷史的な取扱い方に愼重を期ざるをえないわけである。この點、本書に示された二、三の問題點を指摘しておきたい。①全体の構成にからむ人物配置の妥當性の問題——この點、五四運動いごで人物が大きく取扱われるということがなかつたのは、この時期における記述の簡略化と關連するものとみられる。②人物の全体像の把握にからむ問題として——例えば章炳麟の辛亥革命後の動向が一切不明といつた點で妥當性を欠いている。③人物の性格・役割の評價に關連して——多くはその階級的位置ずけが不明確なまに引きあいに出されている。④日本人の取扱いについて——前期には思想家、中期いごは政治家に近い人物があげられ一貫性を欠く點があり、また例えば明治期の大隈の歐米崇拜・アジア蔑視が問題にされたなら、ついでに對華二十一條要求が大隈內閣の下でおこなわれた事實に簡單にでもふれてほしかつた。⑤最後に、個人の意識(＝言動)で叙述をすすめる點について——例えば日露戰爭＝解放戰爭論や辛亥革命への日本の對應の仕方などが、多くは當時の意識形態において描寫され、その合法則性が檢證されないで終つている。

これは概説を書く場合おちいりやすい陷穽であるが檢討を要しよう。

(4)文章　著者の舊著である「近代の中國」(福村書店)は中學生を對象とする小册子であるが、均整のとれた名文であつた。この點、本書は文章表現とバランスの美しさにおいて、大きく後退しているといわざるをえない。①全体の構成からみて必ずしも重要とは思えない事項に多くの説明がくわえられている——第一章アヘン戰爭など。概して「厚古薄今」の傾向があり、全体が頭デッカチ尻スボミの觀を呈している。②難解な語句が多い——つまり引用文がよくこなされていない。例えば快槍、總理衙門の行走、埋頭苦幹といったものには註記すべきであろう。③不必要な人名・件名が多い——例えばデントの使用人鮑鵬、ミルンの弟子梁阿發・李善蘭や華蘅芳、佩文韻府、郴州城といった叙述の展開に必ずしもかかわりあいをもたないものは、取去つた方が理解を容易にすると思われる。

以上、言い足りぬ點もあり、また著者に對して失禮にわたる點もあるかと思われるが、研究成果のとぼしい中で啓蒙的仕事を物された著者の御努力に敬意を表して筆を擱く。

(野澤　豊)

會告

本年は十一月二十日に、日本學術會議會員選擧が行われますが、本會は近畿地方區第一部候補者として

東洋史研究會評議員
貝塚茂樹氏

を推薦することに決定いたしましたから、左様に御諒承下されるようお願いいたします。

東洋史研究會